



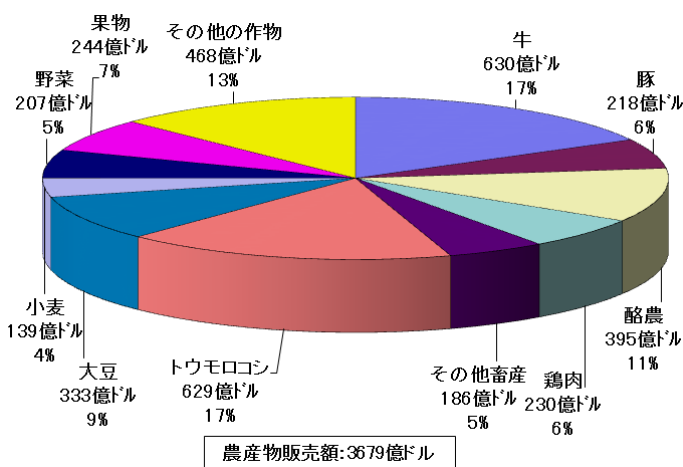
米 国

1 農・畜産業の概況

米国経済における農業の位置付けは、他産業の発展に伴い低下傾向にあるが、2011年のGDPに占める農業生産（農産物販売額：現金収入の暫定値）の割合は2.4%となり、前年を0.3ポイント上回った（図1）。世界的に見ると、2011年の農業生産額は、中国およびインドに次いで第3位となり、前年から順位を落としたものの、農産物輸出額は首位となるなど、依然、米国農業の影響力は、高い水準にある。

2011年の農業経営体数（農産物の年間販売額1,000ドル以上）は、218万2000戸であった。農用地面積は9億1700万エーカー（3億7110万ヘクタール）、1経営体当たりの農用地面積は420エーカー（169ヘクタール）であった。なお、年間10万ドル以上の農産物販売実績のある経営体は全体の17.4%で、全農用地面積の64.5%を占めている。

図1 農産物販売額(2011年)



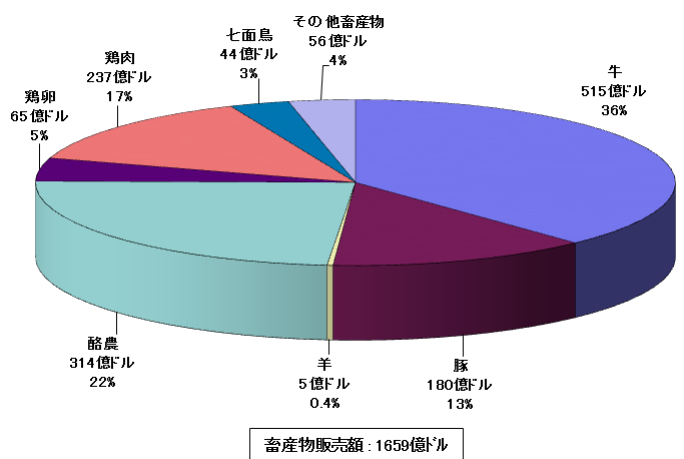
資料：USDA「United States and State Farm Income Data」

2011年の農産物販売額（現金収入、自家消費分を含まず）は、3679億ドルと前年を14.6ポイント上回った（図2）。このうち、作物部門は2020億ドルで、前年比12.5%増となり、特に飼料穀物は同31.6%増となった。畜産部門は、1659億ドル（同17.3%増）となり、農産物全体に占めるシェアは、前年を1.0ポイント上回る45.1%となった。

畜産部門の品目別販売額を見ると、肉用牛が630億ドル（農産物全体に占める割合は17.1%）と第1位で、次いで酪農が395億ドル（同10.7%）となった。

また、作物部門では、干ばつの影響により高値で推移しているトウモロコシの販売額が629億ドル（同17.1%）と最大であり、畜産および作物部門は、米国農業で大きな比重を持っている。

図2 畜産物販売額(2011年)



資料：USDA「United States and State Farm Income Data」

2 畜産の動向

(1) 酪農・乳業

米国は、年間8800万トンを超える量の生乳を生産する世界最大の酪農国である。しかし、国内に巨大な消費市場を抱えていることなどから、国際乳製品市場での米国の地位は、比較的低いものとなっている。

① 主要な政策

酪農の主な制度には、連邦生乳マーケティング・オーダー制度（FMMO）と乳製品価格支持制度（DPPSP）がある。FMMOは、オーダー（生乳取引地域）内で取り引きされる生乳について、それを飲用向けと加工向け3分類の計4分類の用途別に分け、それぞれの最低取引価格を設定するとともに、生乳取扱業者に対して、生産者へのプール乳価（用途別乳価を加重平均した乳価）支払いを義務付けている。これにより、生産者に対しては、安定的な収入を確保すること、また、消費者に対しては合理的な価格で牛乳・乳製品を供給することを目的としている。2000年1月からは、紆余（うよ）曲折を経て、①オーダー数の再編統合（当初の31地域が段階的に縮小され、2004年4月からは10地域となった。）、②生乳の用途区分の再分類（3区分から4区分へ）、③最低取引価格の設定に用いられる価格について、これまでの基礎公式価格（BFP）に代えて、多成分価格形成システムに基づく新基礎価格の導入、などの変更が加えられた。

一方、DPPSPは、米国農務省（USDA）の一機関である商品金融公社（CCC）が、支持価格でチーズ、バターおよび脱脂粉乳を買い上げることにより、加工原料乳の価格を間接的に支持する制度である。

この制度は、2008年農業法において、これまでの加工原料乳価格支持制度の仕組みを実質的に維持した

上で、名称を「乳製品価格支持制度」に改め、加工原料乳の支持価格を廃止して主要乳製品の支持価格を法律で定める制度として変更された。

② 生乳の生産動向

ア 酪農経営体数

酪農経営体数は、小規模層を中心に一貫して減少傾向で推移しており、2011年には、前年比4.0%減の6万戸となった（表1）。一方、1戸当たりの飼養頭数は増加傾向で推移している（図3）。

表1 酪農経営体数、飼養頭数の推移

（単位：戸、千頭、頭/戸）

区分/年	2007	2008	2009	2010	2011
酪農経営体数	69,995	67,000	65,000	62,500	60,000
経産牛頭数	9,189	9,315	9,203	9,117	9,194
1戸当たり飼養頭数	131	139	142	146	159

資料：USDA「Farms, Land in Farms, and Livestock Operations」、

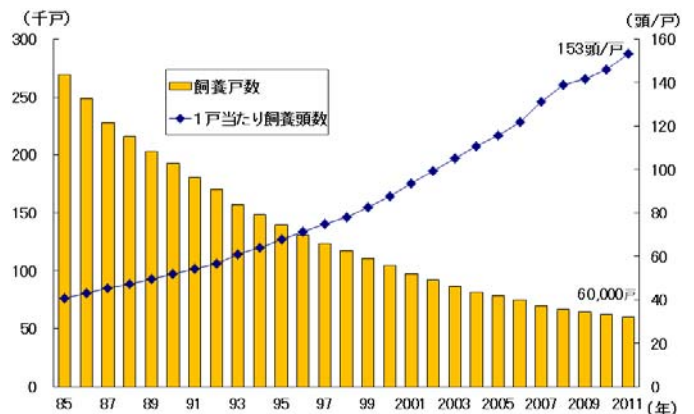
「Agricultural Statistics」、 「Milk Production, Disposition and Income」

注1：酪農経営体数は、2007年以降と2006年以前で集計方法が異なる

注2：経産牛頭数は、年間平均の飼養頭数

注3：1戸当たり飼養頭数は、経産牛頭数を経営体数で除したもの

図3 酪農経営体数および飼養規模の推移



資料：USDA「Farms, Land in Farms, and Livestock Operations」、

「Milk Production, Disposition and Income」

イ 飼養頭数と生産量

経産牛飼養頭数は、1980年代中頃から一貫して減少傾向で推移してきたが、1999年に下げ止まった後は、小幅な増減を繰り返している。2011年の経産牛飼養頭数は、前年比0.8%増の919万4000頭と、わずかに増加した。

また、2011年の生乳生産量は、好調な乳価を受け、酪農家が増頭を行ったことや、1頭当たりの乳量が増加したことを受け、前年比1.7%増の8900万トンと、増加傾向で推移している（表2）。

表2 生乳・乳製品の生産量

(単位:千トン)

区分/年	2007	2008	2009	2010	2011
生乳	84,211	86,174	85,880	87,474	88,978
バター	695	746	713	709	820
脱脂粉乳	589	689	686	709	689
チーズ	4,435	4,496	4,570	4,737	4,809

資料：USDA「Milk Production, Disposition and Income」、「Dairy Products」

注：チーズはカッテージチーズを除く

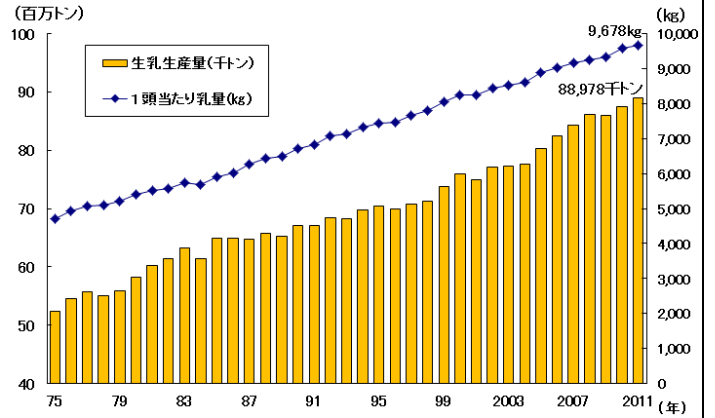
ウ 経産牛1頭当たり乳量

経産牛1頭当たり乳量も増加傾向で推移しており、2011年では、前年比0.9%増の9,678キログラムとなった（図4）。

エ 地域別生産動向

生乳は、全ての州で生産されているが、生産量の5割強は上位5州（カリフォルニア、ウィスコンシン、アイダホ、ニューヨーク、ペンシルバニア）によって占められており、上位10州（6位以下：テキサス、ミネソタ、ミシガン、ニューメキシコ、ワシントン）を合わせて、全体の7割強を占めている。

図4 生乳生産量と1頭当たり乳量の推移



資料：USDA「Milk Production, Disposition and Income」

さらに一部の州では、安価な労働力の確保による大規模化が進んでおり、当該地域を代表するカリフォルニア州は、1993年にウィスコンシン州を抜いて国内最大の生乳生産州になって以降、生産を拡大している。しかしながら、カリフォルニア州の生乳生産量は、2008年終盤の国際乳製品価格の暴落を受けて、2009年には前年比4.1%減1792万トンとなった、その後回復に転じ、2011年は1881万トン（同26.7%増）と増加傾向にある。一方、生乳生産量第2位のウィスコンシン州は、1182万トン（同0.1%増）と横ばいとなった。



酪農家での乳牛飼養風景

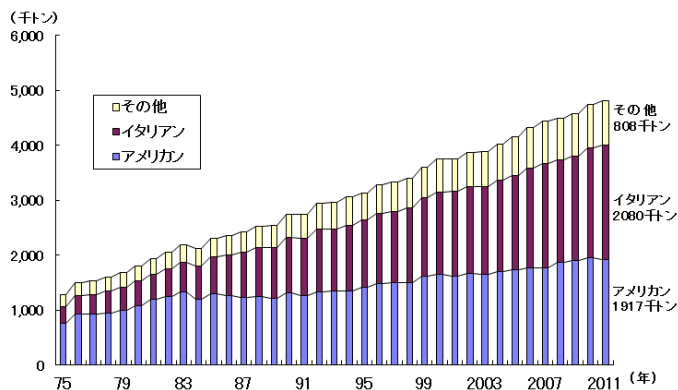
③ 牛乳・乳製品の需給動向

ア 生産動向

2011年のチーズの生産量（カッテージチーズを除く。）は、前年比1.5%増の480万6000トンとなった（図5）。このうち、チェダーチーズを中心とするアメリカンタイプの生産量は、191万7000トン（同1.5%減）となり、モッツアレラチーズなどイタリアンタイプの生産量は、208万トン（同3.8%増）となった。イタリアンタイプは、宅配ピザやファストフードでの需要の増加により、過去20年以上増加基調で推移している。同年のチーズ生産量に占める割合は、アメリカンタイプが前年同月を1.8ポイント下回る39.9%となった。一方、イタリアンタイプが43.3%（同1.4ポイント増）となった。

また、脱脂粉乳の生産量は、前年比2.2%減の51万1000トン、バター生産量は、82万1000トン（同15.7%増）となった。

図5 チーズ生産量の推移



資料：USDA「Dairy Products」

イ 消費動向

1人当たりの年間飲用乳・クリーム消費量（製品ベース、以下同じ）は、ほかの飲料との競合などにより、近年、おおむね減少傾向で推移し、2011年は、前年比

2.4%減の90.1キログラムとなった。なお、飲用乳の消費は、近年の健康志向を反映し、全脂牛乳から低脂肪牛乳、脱脂牛乳など、低脂肪タイプへの移行が進んでいる。

一方、1人当たりの年間チーズ消費量（アメリカンタイプを除く）は、近年、増加傾向で推移しており、2011年は前年比1.1%増の15.1キログラムとなった。また、1人当たりの年間バター消費量は2.5キログラム（同9.1%増）となった。

④ 牛乳・乳製品の価格動向

ア 生乳価格

2011年の生乳の生産者販売価格は、国内外の乳製品需要が堅調であったことから、大きく落ち込んだ2009年から回復し、前年比23.7%高の100ポンド当たり20.14ドルとなった（表3）。なお、加工原料乳の生産者販売価格は、2011年3月以降、数値が公表されていない。

表3 生乳の生産者販売価格

(単位:ドル/100ポンド)

区分/年	2007	2008	2009	2010	2011
加工原料乳価格	18.31	17.91	12.03	14.56	-
生乳平均価格	19.21	18.41	12.84	16.28	20.14

資料：USDA「Agricultural Price」

注1：加工原料乳価格は、グレードBの加工規格の生乳価格

注2：2011年の加工原料乳価格は、数値の公表がないため「-」としている。

イ 乳製品の卸売価格

2011年の乳製品の卸売価格は、メキシコを始め東南アジアなどで需要が増加したことを受け上昇した。脱脂粉乳の年平均価格は、前年比26.7%高の1ポンド当たり151.7セント、チェダーチーズは180.6セント（同

20.7%高)、バターは196.2セント(同13.5%高)となった(表4)。

表4 乳製品の卸売価格の推移

(単位:セント/ポンド)

区分/年	2007	2008	2009	2010	2011
バター	136.8	146.3	124.3	172.8	196.2
脱脂粉乳	177.6	124.6	95.2	119.7	151.7
CHEDDARチーズ	174.1	183.6	125.2	149.6	180.6

資料: USDA「Dairy Market News」

注1: バターはシカゴ・マーカンタイル取引所の現物価格(グレードAA)

注2: チーズはシカゴ・マーカンタイル取引所の現物価格



小売店でのチーズの陳列風景

⑤ 乳製品の政府買い上げ

2011年は、堅調な輸出需要を反映して米国内の乳製品価格が堅調に推移したことから、商品金融公社(CCC)による余剰乳製品の買い上げは実施されなかった(表5)。(2008年は脱脂粉乳、2009年は脱脂粉乳、バターおよびチーズ、2010年はバターおよびチーズで実施された)。

表5 乳製品の政府買い上げ数量の推移

(単位:千トン)

区分/年	2007	2008	2009	2010	2011
バター	0	0	12.9	2.3	0
チーズ	0	0	1.5	0.1	0
脱脂粉乳	0	50.2	104.2	0	0
乳脂肪分ベース (生乳換算量)	0	10.9	318.9	50.8	0
無脂乳固形分ベース (生乳換算量)	0	584.6	1230.6	1.4	0

資料: USDA「Livestock, Dairy, and Poultry Outlook: Tables」

(2) 肉牛・牛肉産業

米国は、世界の牛肉生産量の約2割を占める最大の生産国であると同時に、世界最大の牛肉輸入国でもある。国内的にも、肉牛産業は農産物販売額に占める割合が最大となっており、米国農業の中でも最も重要な部門の一つとなっている。

肉用子牛生産は、家族経営による生産・管理が行われる一方、育成された肥育もと牛は、大規模なフィードロットで効率的な穀物肥育が行われている。また、肉牛の流通面では、大手パッカーによる寡占化が顕著となっている。

① 肉牛の生産動向

ア 肉用牛繁殖経営体数

肉用牛繁殖経営体数(年間に1頭以上飼養)は、近年減少傾向で推移しており、2011年も前年比1.1%減の73万4000戸となった(表6)。

表6 肉用牛繁殖経営体数、飼養頭数の推移

(単位:戸、千頭、頭/戸)

区分/年	2007	2008	2009	2010	2011
肉用牛繁殖経営体数	766,350	757,000	751,000	742,000	734,000
繁殖雌牛頭数	32,891	32,435	31,712	31,376	30,850
1戸当たり飼養頭数	43	43	42	42	42

資料: USDA「Cattle」「Farms, Land in Farms, and Livestock Operations」

注1: 肉用牛繁殖経営体数は、2007年以降と2006年以前では集計方法が異なる

注2: 繁殖雌牛頭数は、各年1月1日現在のもの

注3: 1戸当たり飼養頭数は、繁殖雌牛頭数を経営体数で除したもの

イ 飼養頭数

2011年1月1日現在の牛総飼養頭数は、前年比1.1%減の9268万頭となった。米国のキャトルサイクルは、1996年をピークに8年連続で減少した後、2005年にはいったん上昇局面に転じた。しかし、2006年のテキサス州を中心とした中南部における干ばつ、また、2006年後半以降の飼料コスト高の影響などにより、肉用牛繁殖経営の収益性が悪化し、肉用繁殖雌牛の保留が抑制された結果、牛の総飼養頭数は減少傾向で推移している。

2011年1月1日現在の飼養頭数の内訳を見ると、肉用繁殖雌牛は前年比1.7%減の3085万頭となった。500ポンド(約227キログラム)以上の肉用繁殖後継牛は、干ばつの影響により、早期淘汰が増加したことから514万頭(同5.5%減)となった。

他方、2011年の子牛生産頭数(乳用種を含む)は、肉用繁殖雌牛の飼養頭数が減少傾向で推移していることから、前年比8.7%減の3569万頭となった。

フィードロットの風景



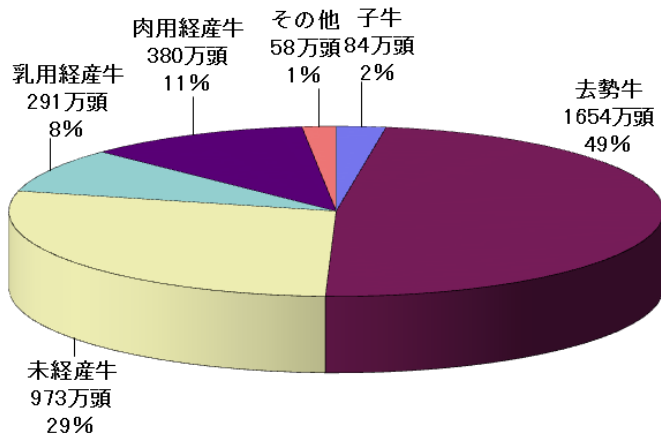
② 牛肉の需給動向

ア 生産動向

2011年の成牛と畜頭数（コマーシャルベース）は、前年比0.5%減の3409万頭となった。

種類別（連邦政府検査ベース）では、乳牛経産牛が同3.8%増、肉用経産牛は前年比4.6%増となった一方、去勢牛が同0.3%減、未經産牛は同3.2%減となった。また、子牛も同2.9%減とやや減少した（図6）。

図6 種類別と畜頭数（2011年）



資料:USDA「Livestock Slaughter」

一方、2011年の成牛のと畜時平均生体重（連邦政府検査ベース）は、干ばつにより飼料価格が高値で推移したことや、肥育牛価格の上昇によりフィードロットからの早期出荷が行われたことから、前年比0.9キログラム減の580.6キログラムとなった。一方、平均枝肉重量（連邦政府検査ベース）は、前年から横ばいの350.6キログラムと前年を下回った。2010年の肥育主要7州（アリゾナ、カリフォルニア、コロラド、アイオワ、カンザス、ネブラスカ、テキサス）の肥育もと牛導入頭数は、2077万頭（同2.1%増）、また、肥育牛出荷頭数は1968万頭（同2.1%増）となった。

2011年の牛肉生産量（枝肉重量ベース）は、と畜頭数が減少したことから、前年比0.5%減の1192万トンとなった（表7）。

表7 牛肉需給（枝肉換算）の推移

（単位：千トン）

区分/年	2007	2008	2009	2010	2011
生産量	12,031	12,095	11,824	11,980	11,921
輸入量	1,384	1,151	1,191	1,042	933
輸出量	650	905	878	1,043	1,263
在庫量	286	291	256	265	272
消費量	12,764	12,334	12,173	11,970	11,584
1人当たり消費量 (年間、キログラム)	29.6	28.3	27.7	27.0	26.0

資料：USDA「Livestock, Dairy, and Poultry Outlook: Table」

注：1人当たり消費量は小売重量ベース

イ 輸出入動向

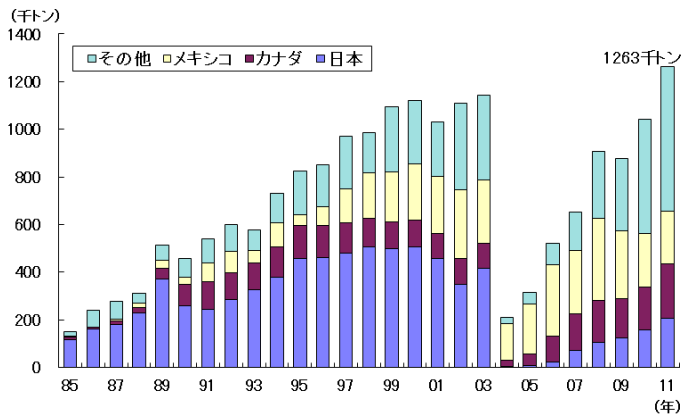
2011年の牛肉輸入量（枝肉重量ベース）は、米国内の生産量が微減となったものの、前年比10.5%減の93万3000トンとなった。国別に見ると、最大の輸入先のカナダは、31万2500（同20.0%減）トンとなった。豪州からの輸入は、米国でのと畜頭数が前年を上回り、加工向けが増加したことから豪州産と競合し、20万5000トン（同20.2%減）となった。

一方、同年の生体牛の輸入は、メキシコが前年比16.4%増の142万1200頭となったものの、カナダは68万6100頭（同35.4%減）となり、全体では210万7300頭（同7.7%減）とかなりの程度減少した。

2003年12月、米国内で初めてBSEが発生した影響を受け、2004年に大幅に減少した牛肉輸出量は、2005年以降順調に回復し、2009年は前年をやや下回ったものの、2011年は米ドル安やアジア・中東向け輸出に後押しされ、前年比21.1%増の126万3000トン

と大幅に増加した。国別では、最大の輸出国であるメキシコ向けが22万1000トン（同2.5%減）となった一方、カナダ向けは22万7000トン（同28.1%増）となった。また、2003年まで最大の輸出相手国であった日本向けは、20万7000トン（同30.0%増）と大幅に増加し、5年連続で第3位の輸出先となった（図7）。

図7 牛肉の輸出量と相手国



資料:USDA/ERS「Livestock and Meat Trade Data」

ウ 消費動向

1人当たり年間牛肉消費量（小売重量ベース）は、牛肉価格高や消費者嗜好の変化により、年々減少傾向で推移し、2011年は、前年比3.9%減の26.0キログラムとやや減少した。

③ 肉牛・牛肉の価格動向

ア 肥育もと牛価格

肥育もと牛価格（オクラホマシティー、600～650ポンド）は、2011年平均では、前年比22.4%高の100ポンド当たり141.2ドルとなった（表8）。

イ 肥育牛価格

チョイス級肥育牛価格（ネブラスカ、1,100～1,300ポンド、去勢牛）は、2011年平均で前年比21.3%高の100ポンド当たり115.2ドルとなり、大幅に上昇した。これは、米国内の需要は減少傾向で推移していたものの、輸出需要が前年に比べ大幅に増加したことが要因と考えられる。

イ 牛肉卸売価格

2011年の卸売価格（チョイス級、600～900ポンド、カットアウトバリュー）は、前年比15.6%高の100ポンド当たり181.3ドルとなった。

ウ 牛肉小売価格

2011年の平均牛肉小売価格（チョイス級）は、前年比9.9%高のポンド当たり482.7セントとなった。

表8 肉牛、牛肉の価格の推移

（単位:ドル/100ポンド）

区分/年	2007	2008	2009	2010	2011
肥育素牛	115.4	107.6	101.9	115.1	141.2
肥育牛	91.8	92.3	82.7	95.0	115.2
牛肉卸売価格 (カットアウトバリュー)	149.8	153.2	140.8	156.9	181.3
牛肉小売価格 (セント/ポンド)	415.8	432.5	426.0	439.4	482.7

資料:USDA「Livestock, Dairy and Poultry Situation and Outlook:Table」

注:カットアウトバリューとは、各部分肉の卸売価格を1頭分の枝肉に再構成した卸売指標価格。枝肉そのものではない。

(3) 養豚・豚肉産業

米国の養豚産業は、アイオワ州やイリノイ州を中心とするコーンベルト地帯において、伝統的に穀物生産や肉牛経営の副業として営まれてきた。一方、ノースカロライナ州やオクラホマ州でのインテグレーションの出現は、養豚産業に対して、生産・流通などの面

で大きな変化をもたらしてきた。また、各州で環境規制を強化する動きがみられることから、大規模経営体による環境問題も顕在化している。

1995年に40数年ぶりに純輸出国に転じた豚肉輸出は、右肩上がりで推移しており、2008年は前年を下回ったものの、中国や韓国の需要の増加を受け、2011年は前年比22.9%増となり、依然、堅調な輸出需要がある。

① 豚の生産動向

ア 養豚経営体数

養豚経営体数は、大規模層を除きおおむね各層で減少傾向で推移し、2011年は6万9100戸となった(表9)。飼養頭数規模別で見ると、100頭未満の層が全経営体数の71.5%を占めているものの、飼養頭数では全体の0.9%を占めるにすぎない。一方、5,000頭以上層は、経営体数全体の4.8%である。全飼養頭数の58.1%を占めており、この割合は上昇傾向にある。

表9 養豚経営体数、飼養頭数の推移

(単位:戸、千頭、頭/戸)

区分/年	2007	2008	2009	2010	2011
養豚経営体数	75,450	73,150	71,450	69,100	69,100
繁殖雌豚頭数	68,177	67,148	64,887	64,925	66,361
1戸当たり飼養頭数	904	918	908	940	960

資料: USDA「Farms, Land in Farms, and Livestock Operations」、「Agricultural Statistics」「Quarterly Hogs and Pigs」

注1: 養豚経営体数は、2007年以降と2006年以前では集計方法が異なる

注2: 飼養頭数は、各年の12月1日現在のもの

イ 飼養頭数

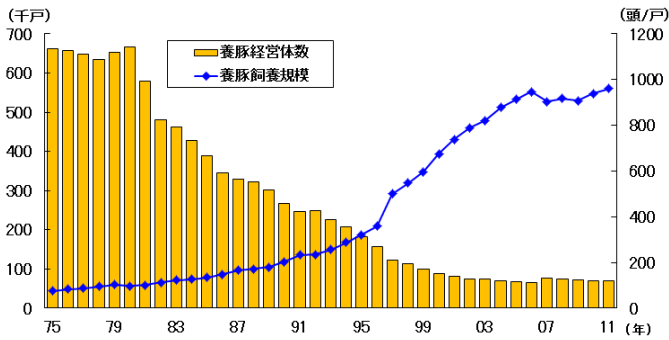
豚飼養頭数は、2003年以降は増加傾向で推移していたが、2007年をピークに減少したが、2010年以降は微増となり、2011年(12月1日現在)では、前年比2.2%増の6636万頭となった。飼養頭数の内訳を見ると、繁殖用豚は580万3000頭(同0.4%増)に、また、肥育豚は6055万8000頭(同2.4%増)となった。

2011年(2010年12月~2011年11月)の子豚生産頭数は、繁殖母豚が前年比2.3%減とわずかに減少したものの、1腹当たり産子数が9.80頭(同1.9%増)となったことから、1億1584万頭(同1.9%増)となった。



肉豚の飼養風景

図8 養豚経営体数および飼養規模の推移



資料：USDA「Farms, Land in Farms, and Livestock Operations」[Quarterly Hogs and Pigs]

② 豚肉の需給動向

ア 生産動向

2011年のと畜頭数（コマーシャルベース）は、前年比0.5%増の1億1086万頭となり、豚肉生産量も1033万トン（同1.4%増）に増加した（表10）。

なお、2011年のと畜時平均生体重（連邦政府検査ベース）は、124.7キログラム（同0.7%増）、また、平均枝肉重量（同）は、93.4キログラム（同1.0%増）となった。

表10 豚肉需給（枝肉換算）の推移

（単位：千トン）

区分/年	2007	2008	2009	2010	2011
生産量	9,962	10,599	10,432	10,189	10,331
輸入量	439	377	378	390	364
輸出量	1,425	2,117	1,857	1,915	2,354
在庫量	235	288	238	245	246
消費量	8,964	8,806	9,013	8,653	8,341
1人当たり消費量 （年間、キログラム）	23.0	22.4	22.8	21.7	20.7

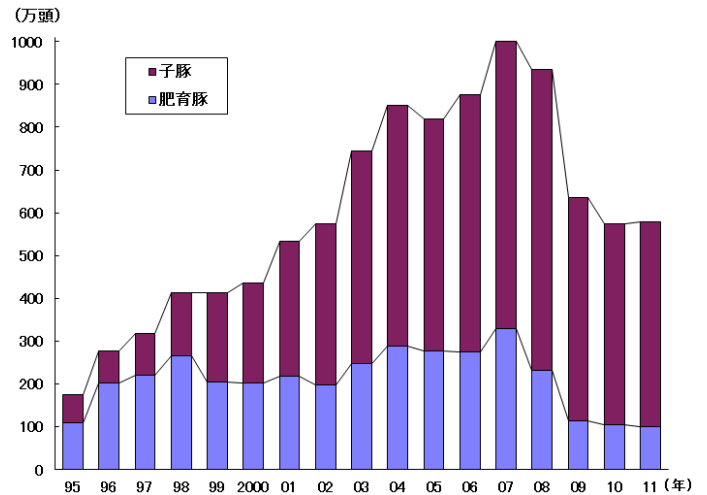
資料：USDA/ERS「Livestock and Meat Trade Data」
注：1人当たり消費量は小売重量ベース

イ 輸出入動向

豚肉の輸入量（枝肉重量ベース）は、2009年以降、増加傾向で推移したものの、2011年は豚肉生産量が増加したことから、前年比6.7%減の36万4000トンと、かなりの程度減少した。国別に見ると、カナダが28万9600トン（同8.1%減（総輸入量に占める割合は79.6%））とかなりの程度減少した一方、デンマークが3万6700トン（同2.0%増の（同10.1%））とわずかに増加に転じた。

また、生体豚の輸入は、ほぼ100%がカナダからのものである。同国からの輸入頭数は、同国の飼養頭数の減少や2008年9月末から実施された食肉の原産地表示（COOL）の強化などの影響が響いたものの、2011年は、579万4600頭（同0.8%増）となった（図9）。

図9 カナダからの生体豚輸入頭数の推移

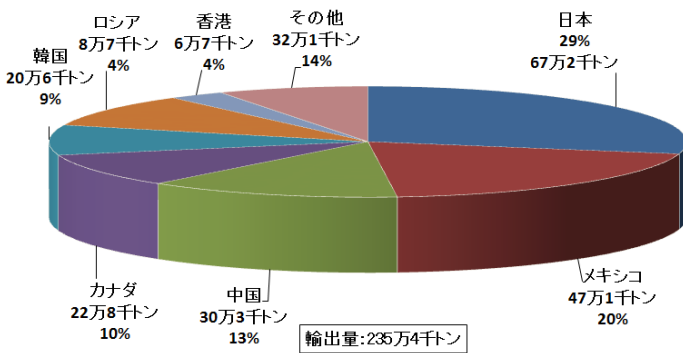


資料：USDA/ERS「Livestock and Meat Trade Data」

一方、輸出量（枝肉重量ベース）は、1991年以降、前年を上回って推移したものの、2009年は世界的な景気の後退による需要の減退や、新型インフルエンザ（H1N1）発生に伴う各国の輸入禁止措置により、一時的に減少した。しかしながら、2010年の輸出再開

により輸出需要が回復したことを受け、2011年は、前年比22.9%増の235万4000トンとなった。国別に見ると、最大の輸出先であり、全輸出量の30%を占める日本向けは67万1700トン（同15.4%増）、第2位のメキシコ向けは、価格帯の安い豚肉需要が増えたことから、47万トン（同0.1%増）となった（図10）。また、第3位に浮上した中国向けは、30万3000トン（同4.2倍）、次いでカナダ向けは22万7700トン（同15.9%増）と、それぞれ大幅に増加した。一方、香港向けは、中国向けが大幅に増加したことを受け、6万7000トン（同27.0%減）と大幅に落ち込んだ。

図10 豚肉の輸出相手国(2011年)



資料:USDA「Livestock, Dairy and Poultry Situation and Outlook」

ウ 消費動向

1人当たり年間豚肉消費量（小売重量ベース）は、ほぼ横ばいで推移していたが、2011年は干ばつにより飼料価格が高騰し、豚肉価格が上昇したことから、前年比4.6%減の20.7キログラムとやや減少し、21キログラム台を下回った。

③ 肥育豚・豚肉の価格動向

ア 肥育豚価格

肥育豚取引価格は、2005年以降、生産量の増加などにより低下傾向となり、2009年に世界的な景気の後退

や新型インフルエンザなどから内需・外需の減退により、前年からかなり大きく落ち込んだ。しかし、2011年は、前年に続き輸出需要が高まったことから、前年比20.0%高の66.1ドルとなった（表11）。

表11 肥育豚、豚肉の価格の推移

(単位:ドル/100ポンド)

区分/年	2007	2008	2009	2010	2011
肥育豚	47.1	47.8	41.2	55.1	66.1
豚肉卸売価格 (カットアウトバリュー)	67.5	69.2	58.1	81.3	93.7
豚肉小売価格 (セント/ポンド)	287.0	293.7	292.0	311.4	343.4

資料:USDA「Livestock, Dairy and Poultry Situation and Outlook:Table」

注1:肥育豚価格は、全米の平均価格。

注2:カットアウトバリューとは、各部分肉の卸売価格を1頭分の枝肉に再構成した卸売指標価格。枝肉そのものではない。

イ 豚肉価格

・ 部分肉卸売価格

2011年の部分肉卸売価格（カットアウトバリュー）は、前年比15.3%高の100ポンド当たり93.7ドルとなった。

・ 豚肉小売価格

2011年の平均豚肉小売価格は、前年比10.3%高の1ポンド当たり343.4セントとなった。

(4) 養鶏・鶏肉産業

米国の養鶏産業は、飼料穀物の一大生産国という利点を生かし、生産から流通までの一貫したインテグレーションの進展により、極めて効率的な生産が行われている。また、国内では、消費者の健康志向からむね肉を中心として消費を大きく伸ばすと同時に、不需求

部位のもも肉を中心に、鶏肉生産量の2割弱を輸出している。

① ブロイラーのふ化羽数の動向

2011年のブロイラーふ化羽数は、ブロイラー価格（生体1ポンド当たりの生産者販売価格）が前年を下回って推移したことなどから、前年比1.9%減の90億5400万羽となった。

② 鶏肉の需給動向

ア 生産動向

2011年のブロイラー生産量は、ブロイラーふ化羽数が減少したものの、1羽当たりの重量が増加したことにより、前年比1.9%増の1687万トンとなった（表12）。1羽当たり平均重量（生体ベース）は、骨なしむね肉の需要増に伴うブロイラーの大型化を背景に近年増加傾向にあり、2011年は2.63キログラム（同1.5%増）となった。

表12 ブロイラー需給(可食処理ベース)の推移

(単位:千トン)

区分/年	2007	2008	2009	2010	2011
生産量	16,226	16,561	15,935	16,563	16,874
輸入量	36	43	45	48	31
輸出量	2,678	3,157	3,093	3,068	3,162
在庫量	326	338	279	351	268
消費量	13,590	13,435	12,946	13,472	13,663
1人当たり消費量 (年間、キログラム)	38.7	37.9	36.2	37.4	37.6

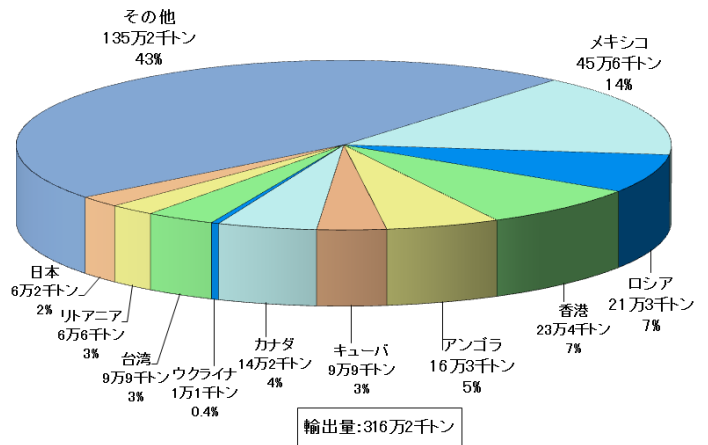
資料：USDA「Livestock, Dairy and Poultry Outlook: Table」

注：1人当たり消費量は小売重量ベース

イ 輸出動向

ブロイラーの輸出量は、2005年以降増加傾向で推移し、2009年以降、減少に転じたものの、2011年は好調な輸出需要を背景に、前年比3.1%増の316万トンとなった。輸出先上位3カ国を見ると、メキシコ向けは同4.1%増、香港向けは同20.0%増となった一方、ロシア向けは関税割当量の減少などにより同35.8%減となった（図11）。

図11 鶏肉の輸出相手国(2011年)



資料：USDA「Livestock, Dairy, and Poultry Situation and Outlook」

ウ 消費動向

1人当たりの年間鶏肉消費量（小売重量ベース）は、健康志向の高まりや牛・豚肉価格よりも安価であることなどから、2011年は前年比0.5%増の37.6キログラムとなった。

③ ブロイラーの価格動向

ア ブロイラー価格

2011年のブロイラー価格は、前年比4.9%安のポンド当たり46.7セントとなった（表13）。

イ 鶏肉価格

・ 卸売価格

2011年のブロイラーの丸どり卸売価格（中抜き、12都市平均）は、前年比4.7%安の1ポンド当たり79.0セントとなった。なお、国内向けが主体となっているむね肉がポンド当たり125.1セント（同14.0%安）であるのに対し、輸出向けが主体のもも肉は同64.8セント（同26.3%高）となっている。

・ 小売価格

ブロイラーの丸どり小売価格（中抜き）は、前年比2.2%高の1ポンド当たり129.1セントとなった。

表 13 ブロイラー、鶏肉価格の推移

(単位:セント/ポンド)

区分/年	2007	2008	2009	2010	2011
生産者販売価格 (生体)	43.9	46.6	45.2	49.1	46.7
卸売価格 (丸どり)	76.4	79.7	77.6	82.9	79.0
丸どり小売価格	111.5	120.7	127.8	126.3	129.1

資料 : USDA「Livestock, Dairy, and Poultry Outlook: Table」

(5) 飼料穀物

米国は、世界最大の飼料穀物の生産・輸出国である。飼料穀物の主力であるトウモロコシは、世界の生産量の約4割、輸出量はその約5割を占めていることから、世界の需給動向に与える影響力は極めて大きなものとなっている。

① 穀物の生産動向

2011/12年度（9月～翌8月）のトウモロコシ（サイレージ用を除く）の生産量は、前年度比0.7%減の123億6000万ブッシェル（3億1400万トン）と、前

年をわずかに下回った（表14）。これは、収穫面積が前年を3.1%上回った（8400万エーカー（3399万ヘクタール））ものの、1エーカー（約0.4ヘクタール）当たりの単収が、同3.7%減の147.2ブッシェル（1ヘクタール当たり9.3トン）と、前年を下回ったためである。2011/12年度末在庫は、前年度比12.3%減の9億8900万ブッシェル（2512万トン）となった。

表 14 トウモロコシ需給の推移

(単位:百万トン)

区分/年度	07/08	08/09	09/10	10/11	11/12
生産量	331	307	333	316	314
国内消費量	262	259	282	285	279
うち飼料向け	149	132	130	122	115
輸出量	62	47	50	47	39
期末在庫量	41	42	43	29	25

資料 : USDA「Feed Grain Database: Yearbook Tables」



トウモロコシの収穫風景

② 穀物の輸出動向

2011/12年度のトウモロコシの輸出量は、前年度比15.9%減の15億4300万ブッシェル（3919万トン）となった。このうち、最大の輸出先国である日本向けは、前年度比33.6%減の930万トンとなった。なお、日本向け輸出量は、穀物輸出量全体の23.7%を占めている。

③ 穀物の価格動向

2011/12年度のトウモロコシの生産者販売価格は、燃料用エタノール原料向け需要が引き続き増加した一方、飼料および輸出向け需要が前年を下回ったことから、前年度比104セント高の1ブッシェル当たり6.22ドルとなった（表15）。

表15 トウモロコシ価格の推移

(単位:ドル/ブッシェル)

区分/年度	08/09	09/10	10/11	11/12
生産者販売価格	4.06	3.55	5.18	6.22

資料：USDA「Agricultural Prices」